



福田恆存全集

第一卷

福田恆存全集 第一卷

昭和六十二年一月三十日第一刷發行
昭和六十二年五月十五日第二刷發行

定價五千五百圓

著者 福田恆存

發行者 西永達夫

發行所 株式會社 文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三ノ二十三
郵便番號一〇二
電話東京(三)二二一三三(大代表)

印刷所 精興社

製本所 加藤製本
製函所 加藤製函

©TSUNEARI FUKUDA 1987

萬一、落丁、亂丁の場合はお取替いたします

ISBN 4-16-363350-2

Printed in Japan

目次

I

近代日本文學の系譜

現代日本文學の諸問題

横光利一

嘉村礒多

芥川龍之介 I

芥川龍之介 II

志賀直哉

永井荷風

宮本百合子

萩原朔太郎

石川淳

11

57

75

97

114

179

201

210

256

267

276

坂口安吾
太宰治
中野重治
伊藤整
石川啄木
小林秀雄
谷崎潤一郎
國木田獨步
田山花袋
大岡昇平
岸田國士

458 445 430 414 405 386 376 365 345 310 291

II

批評家と作家との乖離について	469
諷刺文學について	473
ふたたび諷刺文學について	480
日本語普及の問題	485
私小説のために	490
批評の正しき読み方	501
素材について	509
文藝批評の態度	515
國運	521
同時代の意義	526
荷物疎開	531

民衆の心

職業としての作家

表現の倫理

私小説的現實について

人間の名において

文學と戰爭責任

小説の運命 I

小説の運命 II

世代の對立

現代人の救ひといふこと

一匹と九十九匹と

覺書 一

655

640

632

621

605

596

588

578

567

558

545

536

福田恆存全集 第一卷

裝釘 柴永文夫
題簽 田中眞洲

I

近代日本文學の系譜

- 一 二葉亭四迷
- 二 島崎藤村・田山花袋
- 三 森鷗外
- 四 夏目漱石
- 五 志賀直哉
- 六 葛西善藏・嘉村礒多
- 七 北村透谷・國木田獨步
- 八 芥川龍之介
- 九 プロレタリア文學・新感覺派文學
- 十 現代（戦前まで）

僕には明日の天氣を語るやうに、明日の文學について云する惡趣味は毛頭ない。ただ手の施しやうのない現實のうちにあがきながら、しだいに洗はれ露出してゆく僕たち自身の姿の寒しさを眺めるにつけ、想ひは近代日本文學の發想と系譜とに遡つてゆくばかりである。その愛情も憎惡も、尊敬も輕蔑も、やはり肉親のそれである。父親の過失をいとほしみながら、兄弟の放縱は許せなかつたり、曾祖父を憎む心のうらで祖父の苦業に頭をさげてみたりする。とにかく、そのやうな覺書をするすことによつて、僕は現代の作家たちに話しかけたいのだ——もしなんらかの後楯がなかつたなら、彼等はこの混亂せる現實をまへにして自己の存在理由を主張しうるであらうか、と。戰爭中は情報局が作家たちに鞏固な足場を提供し、彼等が直接に現實の荒波に身を挺し足を浚はれる危険から衛つてくれた。しかし、一群の良心的な作家たちは口を揃へてかういふであら

う。吾とはそのやうな便乗を憎み侮蔑してきた、いさぎよく身を卻け、沈黙を守つて、強權の壓迫に抗してきたのだ、と。もちろん僕はその種のひとびとに敬意を表するに吝かではない。しかしそのやうな人たちにしても、いはゆる便乗作家といかほどの逕庭があらうかと、これは冷淡な批判ではなく僕自身もその末端につらなれるものとしての自省を新たにするのである。なるほど強權に便乗しはしなかつた。が、彼等の情熱はわづかに強權に對する憤懣にのみ懸けられてゐはしなかつたか。あたかも天秤の分銅のやうに、それ自身單獨では意味を失ひ、ただ反對勢力との均衡においてのみ、その力と充足感を覺えてゐたのではないか。とすれば、いまや強權は除去せられ自由が與へられた以上、かへつてそれはその方途を見失ひ、己が意義と眞實とをどこに見いだしてよいかに迷つてゐるのではなからうか。僕たちはその舊のままの表情に彼等の無力と不誠實と以外のなにを期待しうるといふのであらうか。

現代の作家たちが直面してゐるかくのごときディレンマは、遠く半世紀前における近代日本文學の發想に窺ひうるものであり、のみならずその後ずつと今日に至るまで近代日本文學の主題として把握しうるものであるとすらいひえよう。

一

内田魯庵は「二葉亭四迷の一生」のうちでつぎのやうなことを語つてゐる。「夫なら二葉亭は舊人として小説を書くに方つても天下國家を揮廻しさうなもんだが、藝術となると然うで無い。(中略)實行家としてこそ左したる手腕を示しもせず、又手腕が無かつたかも知れぬが、頭の中の經綸は決して空疎で無かつた。若し小説に假托するなら矢野龍溪や東海散士の向ふを張つて中里介山と人氣を争ふぐらゐは何でも無かつたらう。二葉亭の頭と技術とを以て思ふ存分に筆を揮つたなら日本のデュマやユーゴーとなるのは決して困難で無かつたらう。が、藝術となると二葉亭は此の國土的性格を離れ燕趙悲歌的傾向を忘れて、天下國家的構想には少しも興味を持たないで矢張り井情事のデリケートな心理の葛藤を題目としてゐる。何十年來シベリヤの空を睨んで悶々鬱勃した磊塊を小説に托して洩らさうとはしないで、家常茶飯的の平凡な人情の紛糾に人生の一翳を探して描き出さうとしてゐる。」

この二葉亭觀のもつ重大な意味は、おそらく魯庵自身においても意識されてゐなかつたにさうゐない。明治二十年の「浮雲」から第二作の「其面影」に至るまで約二十年間、二葉亭はなにをしてゐたのか。現代の文壇常識ではほとん

ど理解のできぬ事實である。その間、彼は「シベリヤの空を睨んで」過しながら、ときをりその片言隻句のうちに文學に對する不信を表明してゐたのである。田山花袋は「近代の小説」のなかで二葉亭を回顧して、かう述べてゐる——「藝術をすら疑ふといふ心持、もつと眞面目に人間のしなければならぬものが澤山にあるといふ心持、日本は今ほそれどころではない、まごまごすれば、亡國の憂目を見なければならぬといふやうな心持、さういふ心持もはつきり理解が出来るやうな氣がした。」魯庵と花袋とのみにかぎらぬ、その後も二葉亭を論ずるものは、この「實行と藝術」との對立において、彼の文學的生涯の解明を試みてきた。しかし彼のうちにおけるこのやうな對立がなにを意味するものであつたか、また、近代日本文學の發想をこのやうな對立に見いださねばならなかつたといふ事實は、いかなる文學史的必然によるものであつたか、問題はそこにある。藝術を生活に對立するものとして把握したことは、二葉亭の性格に深く根ざした必然性ではあつたが、それはまた當時の知識人にとつても動かしがたい必然であつた。いふまでもなく、彼等の藝術概念は決して彼等の生活から自然發生的に歸結せられたものではなく、十九世紀ヨーロッパの作品とその藝術理論とから歸納して得たものであつた。いはば彼等は當時の現實を、また彼等自身の生活や心理を裁く眼を、明治十年代の現實そのものによつて養はれ

たのではなく、フランスやロシアのリアリズム文學によつて與へられたのである。ヨーロッパにおいてその文學の生活に對してもつてゐた傾向がそのまま日本に移し植ゑられたとき、大地をかすつてつひに現實を捕捉しえなかつたのは當然である。ここに、捕捉しえなかつたといふのは、現實の機構が、適用せられた藝術概念の手に餘つたことを意味するのではない。まさに逆である——明治十年代の日本の現實、乃至はそれに絡みあはされた心理の委曲は、十九世紀中葉のヨーロッパの現實から必然的に生みだされたリアリズム文學の方法を適用するにはあまりに素朴でありすぎたのである。僕は「浮雲」に「地層の斷面圖」（露伴）を見るといふやうな感心の仕方にはくみしえない。所詮それは貧しげな拵へものであり一分の隙もなく組み立てられた書割のうしろでは、薄暗い樂屋に寒としたすきま風がかよつてゐる。したがつてこの作品をとほして當時の時代的な精神風景を解説し主人公に明治初期の知識階級の性格を看取するがごとき批評方法を僕は全面的に否定したいのである。

そのやうな批評の方法は一「浮雲」にとつてのみならず、また近代日本文學全體に對しても無意味な試みであるといへよう。理由は明白である——獨歩の言葉をもぎつていへば、僕たちの作家は「戀」を描かうとしたのではなく、「戀を戀する」心にその眞實を懸けたのである。作品に實

體をあてにしてもむだである。作家の眞實はつねにその態度の眞實によつてのみ計りうる。

しかしながら近代ヨーロッパのリアリズムとはそのやうなものではなかつた。それはたしかに作家の自我と生活との完全な追放、自己主張の拋棄のうへに成り立つたものであり、社會に對する改善の意慾と責務との喪失、文明の否定、人間の善性と自由意思とに對する冷笑を、その根柢に潜めてゐた。とすれば、かくのごとき絶望的な不毛の地に築かれた執拗な現實の實體的造型を、僕たちはいかに解釋すればよいのであらうか。幻滅と否定とは、いかにして創造と結びついたのであらうか。ここに僕は一つの逆説を提出するよりほかに方法を知らない——追放された自我を勝利に導くために殘された唯一の道は、己れを追放した他者と社會とを克明に陳述描寫することであり、否定のかなたにふたたび善を打ち建てるためには、あらゆる惡を自己の眼の届きうる範圍内に閉ぢこめてしまふことにほかならない。それは一種の寢業ひんぎに似たものであつた。絶縁と敵對といふ外觀のうらで、藝術と社會とは、そして藝術家と社會人とは、ひそかに手を握りかはしてゐたのである。かうした逆説を素朴に表むきのまま受け容れ、リアリズムに無關心の描寫、自己否定、社會との絶縁をしか理解しえなかつたのは、五十年前の日本として當然のことではあつたが、この錯誤が現代までもちこされてゐる事實は、僕たちの決

して見逃しえぬものであらう。

近代ヨーロッパの作家たちにとつて、藝術は表面さう見えるがごとく實は生活と對立するものではなかつた、といふよりは自我と、それに對立する自我、乃至は社會とを調和せしめようとする努力の場として、藝術が喚び求められたのである。それは意思的な行爲であつて、實行と對立せぬばかりではなく、日常生活における社會的な行動によつては解決しえぬ地點にまで逐ひこまれたものに許された唯一の手段にほかならない。一時代の様式獲得の榮冠は、つねにかういふ人たちの頭上に授けられてきた。

僕が近代日本文學の作品について實體性の稀薄をいつたのはこの意味においてである。明治初年にその青少年期をおくつた二葉亭のまへに、當時の社會的現實は行動によつて解決しえぬ形ではけつして現れてこなかつたはずである。すくなくとも彼はさうした突き詰めた形において現實を把握してゐなかつたといへよう。しかも彼がロシア自然主義文學から學びとつた藝術概念は、現實に對する作家の自我擴大とその意思的な鬭争とを教へずに、その外装であり方法であつたにすぎぬ自我の抑壓と喪失、社會的現實に對する敵視と絶縁とを彼に強制したのである。二葉亭は當然、二元的な態度を採らざるをえなかつた——内省による心理主義を藝術に、そしてそのやうな藝術概念によつては始めから否定せられざるをえぬものとして、自己主張の役割は